

第2章 久慈川の歴史・文化

(1) 久慈川と人々との関わり

現在の久慈川流域の地形は、地質学的に、最後の海水面上昇が終り、海が退いた縄文時代に形づくられた。その後弥生時代に入ると稲作が伝わり、人々は高台から沖積平野に下りて稲作をはじめたと推察される。人々が久慈川との生活のかかわりをもつ様になったのは、この時代からと考えられる。

古代人の足跡は、出土した土器や石器及び古墳など様々な遺跡として今に伝えられている。村をつくり、豪族が生まれ、そして常陸の国が出来た。

この地方の昔の様子を書き記した貴重な文献として、奈良時代に書かれたとされる「常陸国風土記」などがある。

1) 「久慈」の名の由来

奈良時代の『常陸国風土記』には、久慈の地名の由来や川の様子が記されている。

「古老のいへらく、郡こおりより南近くに小さき丘あり。かたち、鯨鯢くじらに似たり。倭武やまとたけるの天皇、よりにて久慈と名づけたまひき」とあり、これが久慈の地名のひとつの由来と考えられている。また、久慈川沿いの那珂市（旧那珂町）からは「ナカマチクジラ」が発見されている。



「久慈」の名の由来とされる『鯨鯢の岡』〔常陸太田市(旧金砂郷町)〕 (平成14年撮影)

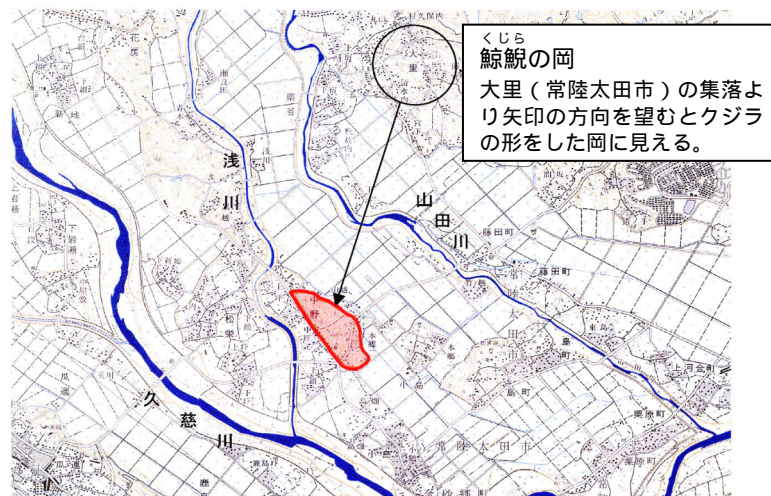


図 2-1 「鯨鯢の岡」位置

2) 久慈川の古代

久慈川に臨んだ木崎、額田、神崎地区等には、遺跡や古墳が多く分布している。これら遺跡等は台地で多く確認されている。人々は洪水が氾濫する低地を避け高台に住居を置き、川が氾濫する沖積平野では稲作を行い、川では魚介類を採取していた。こうした遺跡や文献により、当時の人々が久慈川に対して抱いた恵みと恐れをうかがい知ることができる。

梵天山古墳

常陸太田市島町にある古墳で、13基の高塚墳と百穴とよばれる横穴群よりできている。この古墳群を梵天山古墳群とよんでいる。主墳は梵天山古墳で、全長151mで、茨城県では石岡市の舟塚山古墳(全長182m)に次ぐ大規模な前方後円墳である。古墳時代前期の古墳と推定される。この古墳は当時、豊かな久慈川の水田地帯を控え、大きな勢力をもっていた久自国造(舟瀬足尼)の墓と考えられている。宝金剛院性海寺のすぐ北側にある。昭和28年7月9日、茨城県指定文化財(史跡)に指定された。



図 2-2 梵天山古墳位置



梵天山古墳入口(常陸太田市)

川の恵み・鮎・鮭

『常陸国風土記』では、当時の人々の暮らしを窺い知ることできる。

「郡の北二里に山田の里あり。多く壅田(新田のこと)となれり。あらゆる清き河は、源、北の山におこり、近く郡家の南を経て、久慈の河に会う。多く年魚を取る。大きき腕のごとし」。アユは奈良時代から漁労の対象であったことがわかる。また、秋に産卵のため遡上する鮭は、捕獲が容易であるので、古代より人々の貴重なタンパク源であったと考えられる。この鮭をめぐるのは、戦国期には下流の石神城主と上流の額田城主の間で争いが起こり、半月交代で鮭を捕る協定を結び、お互いに留や堰を造った。石神方では「留」と呼び、額田方では「堰」と呼んだ。下流より1の留、2の留、3の留、4の堰、5の堰、6の堰を造った。那珂市本米崎の『四堰』という地名は、当時の名残である。

防人の歌

奈良時代には、わが国を外敵から守るため、東国から多くの若者たちが徴収され、はるか西の果ての筑紫国（北九州）まで、防人として派遣された。だが、こうした若者たちに、無事に故郷へ帰れる保障はなかった。『万葉集』には、それぞれの故郷から出征した若者たちの離別の歌が、数多く収録されている。丸子部佐^{まろこべのすけお}は、久慈川のほとりから防人として出征した若者の一人で、「久慈川」に託して次のように詠んだ。

久慈川は 幸^{さけ}くあり待て 潮舟^{しおぶね}に
ま梶^{かじ}しじ貫^ぬき 我^わは帰^{かえ}り来^こむ

「久慈川よ、清い流れのままに変わらず待っていてくれ。私は潮舟に梶〔權〕をいっぱい通し急いで、帰ってこよう」 いま、幸久橋のほとりには、この歌を記した碑文が建っている。



久慈防人の碑 (常陸太田市)

久慈防人の碑

幸久^{さきく}橋のすぐ側の堤防上に建てられている「久慈防人の碑」。明治13年、この場所に、上河合村と額田村が共同で久慈川最初の橋を架けることになった。しかし、橋の名で争いが起き、ことは県令のところを持ち込まれた。県令はそのとき県属をしていた野口雨情の叔父の野口勝一に相談した。勝一は教養人だったので、すぐさま丸子部佐の歌を思い起こし、「さけく」は「幸久」に通じるとしてこの名を推薦し、結局これが採用された。のち、上河合、下河合、藤田、島、粟原の5村合併でできた村も幸久村と名づけられた。幸久村は昭和29年の町村合併で常陸太田市に属することになった。

3) 久慈川流域と佐竹氏

佐竹氏

中世の久慈川流域の常陸の国一帯は、清和源氏の末裔とされる佐竹一族が支配していた。佐竹氏は太田に城を構え、常陸の国に広く権勢を張っていた。とくに戦国時代の第20代佐竹義宣は秀吉の小田原上攻めに武勲を立て、常陸国奥7郡、下野国、奥州の1部を領地とし、文禄4年（1595）には54万石の領国を持ち、豊臣6大名の一人と数えられるほどの大大名となった。秀吉死後家康によって秋田の久保田城に国替えになり、久慈川流域の佐竹氏の支配は終焉する。久慈川流域には佐竹氏の奥州進攻に際して築城したり、その後の領国支配のための出城など、佐竹氏ゆかりの城跡が多数見られる。代表的なものとして、棚倉町の赤館^{あかだて}城跡、棚倉城址、塙町の羽黒山城址、矢祭町の東館城址、大子町の大子城址、常陸大宮市（旧山方町）

の御城址、常陸太田市（旧金砂郷町）の金砂山城、常陸大宮市（旧大宮町）の部垂城址、常陸太田市の馬坂城址などなどがある。

根小屋川

久慈川の源は、八溝山に発する。本流は八溝山の北面を下り、段河内で白子川を合わせ棚倉、塙、矢祭町に流れる。もう一つの久慈川源流は八溝川である。これは八溝山の南面を下り、大子町下野宮で本川に合流する。福島県側の北側にもう一本、分水嶺を超えて久慈川に流れる川がある。これが根小屋川である。これは人工的に分水嶺を開削して久慈川に流れ込む川である。

『棚倉町史』一卷に「天正4年（1576）19代佐竹義重が赤館を奪った時、会津の芦名盛公が此事を聞いて大いに怒って、南郷を水攻めにせんとして、北郷にある阿武隈川支流の社川に玉野堰を設け、分水嶺の山を掘り切って一挙に水を引き入れるため作った戦略上の川が、根小屋川である」とある。およそ400年前に堰から合流点までの10kmの開削は大土木工事であったと思われる。上流の檜木川と下流の根子屋川は棚倉城の濠に水を供給し、干ばつ時には堀の水は下流の水田に供給されてきた。

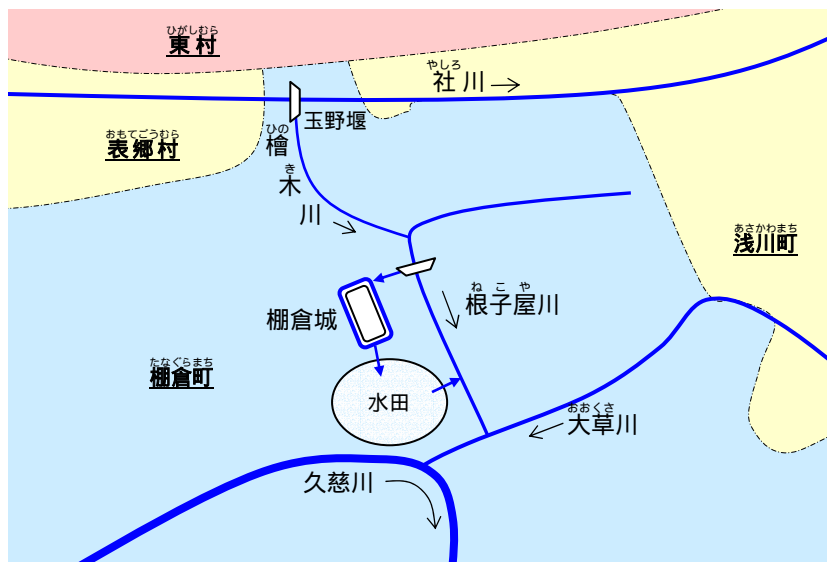


図 2-3 根子屋川周辺の河川

4) 天狗党

江戸幕末、水戸藩内で尊皇攘夷を唱えた武田耕雲斎、藤田小四郎らによる天狗党は、元治元年（1864）筑波山で挙兵し、常陸国を中心に各地を転戦し幕府軍と戦った。最後は悲劇的な結末となった彼らの足跡を、久慈川流域の各地で見る事が出来る。

久慈川上流の棚倉町段河内には、八溝山で戦い敗れ棚倉藩に処刑された兵士たちの「天狗党の墓」がある。また天狗党の別働隊として水戸藩内各地を転戦し、塙の代官所で処刑された田中愿蔵の刑場跡が、塙町の久慈川のほとりに碑として残されている。



「田中愿蔵刑場跡」の碑(塙町)